

「自分で選ぶ」

私の娘の幼い頃は、おとなしい感じの子でした。

公園に遊びに行っても、積極的な子たちに気後れするのか、順番待ちの列に入ることすらできず、立ちすくんでいる。

そんなことが珍しくありませんでした。幼稚園の頃、華やかな応援をするチアガールが本当は好き。家に帰ればまねをして元気に踊る。

でも、一歩外に出ると、途端に固まってしまう。そうこうしているうちに、卒園前、幼稚園最後の行事である「聖劇」の役決めの日を迎えました。私は本当にやりたい役に立候補するように、娘にうるさいほど言い聞かせてから幼稚園に送り出しました。その日、幼稚園に娘を迎えに行きました。すごく嬉しそうです。「ナレーターになれたよ!」。ナレーターさんの役といえば、舞台の脇にみんなと並んで歌い、セリフをワンフレーズづつ言って、お芝居を進行させる役です。

私は家に着いた途端、本当に数時間寝込んでしまいました。私の中では、ナレーターさんというのは、舞台上で演じる役につけなかった子がやるもの・・・そういう役割をすることに、娘はあんなに喜んでいる。うちの娘はどうかしている・・・。

娘の教育に全力を注ぐ専業主婦として過ごしてきた数年間、一体、私は何をしていたのか。もう立ち上がれないほど落ち込みました。いよいよ聖劇の本番の日を迎えました。目の前の娘はそれはそれはキラキラと輝いていました。まさに全身で楽しく歌っている。舞台の脇にいるのに、まるでスポットライトを独り占めしているかのようなまぶしさでした。

どうかしているのは、娘ではない、私の方だとつくづく思いました。「自分のことを一番わかっているのは自分なのだ」と静かに抗議されている、そういう感情が自然に湧いてきました。そして専業主婦でいることをやめよう、そう心に決めたのです。娘には娘の、私には私の人生がある。誰かの人生に乗っかるような日々は自分にはむいていない。ナレーターさんという「大役」が身をもってそう教えてくれました。